【勤務参考】94　　１６．１．２８

技術開発官（船舶）

緒明亮作氏（元開発官）のエッセイから（その２）

（つづき）

【エッセイ⑥】

幼い頃から名人になりたいと思った。先祖代々船大工であるから、職人気質かもしれない。名人とはなんであろうか。亡父の定義によると、「他人より巧みであるばかりでなく、早く出来る人のこと」のようである。

父豊三郎は正規に造船学を修めたわけではないが、造船の図面ばかりでなく、レシプロエンジンからプロペラまで、手早く筆算で設計し毛筆で図面を描いた。

祖父菊三郎は緒明造船所と緒明汽船の創設者で、勘は良かったが外国語はおろか漢字もろくに読めなかったから、その補佐をする必要に迫られてのことであろうが、明治時代のエンジニアは皆そんな恰好だったらしい。

旧海軍きっての名設計者牧野茂大佐の下で軍艦設計を学んだが、その頃は名人とは「一生修行を怠らぬ人」だと考えた。それは言うは易く行うは難い。生半可通の知ったかぶりは論外だが、ある程度のレベルまで達してプロとして名が通るようになると、現代のような情報化時代には世間が放っておかない。始終引っ張り出されて喋らされたり書かされたりしていると、物理的にも時間不足で修行が出来ない上に、修行というものは強い習慣性があるので、ある期間中絶すると殆ど再開が不可能となる。芸術家だと、濫作（らんさく）で身を滅ぼしてしまう。

名優の演技は同じ芝居を何回繰り返してもその都度今度こそは完璧のものたらんことを期しているのであろう。昨日は会心の出来だったから今日もあのくらいで良いというのではなくて、今日の吾は昨日の吾ならずという信念に生き、それ故に人を惹きつけるに違いない。ところが大抵の人間は、一通り仕事が出来るようになると、その後は自分の修得した知識の切り売りだけで、環境が自然に呈する刺激以外には応じようとしないから、「ピーターの法則」による階層能力限度に到達してしまい、非能率、錯誤、沈滞の元凶となる。しかし、そのかわりに、名人となるための時に家庭をも犠牲にした血の滲むような努力をしないですみ、人生を充分に享楽できるのだから、いずれかの途を選ぶのが幸福かは当人の価値判断による。

還暦まであと三年の現在に至って、よく考えた。・・・名人とは、「外界に自分の能力を適応させることによって、最大効率を発揮する術を会得した人間である」と。

具体的に言うなら、文士、スポーツ選手、写真家、技術屋などは、いずれも凝視する能力が基本である。偉大な作家は、凡人が見落としてしまうような微妙な表情や挙動や事物の景観を、しかと捉える犀利（さいり）な観察力があるだろうし、野球の強打者は、投手の身体の動きに目移りしたり、気後れのため精神統一が出来なくて、球筋を見極められないのであろう。このような能力は、天賦の才もなくはないが、大部分はたゆまぬ訓練と工夫によって会得すべきものである。

凝視能力と一口に言っても、単に精神統一だけではない。戦場で夜間の見張り能力を発揮しようとすれば、暗順応の問題のほかに、微光力に敏感な視神経細胞の分布から、凝視しようとする目標を直視しないで、上下左右に視点を移すテクニックが必要である。従って一流の見張り員たるには、自分の使用する眼鏡の工学的構成を理解する知識は無論のこと、実験心理学および生理学の基礎知識が必要だし、更に名人の域に達しようとするならば、偏光やコントラスト利用のための物理学、環境を理解し予測するために、気象学、地球物理学、天体との誤認を防ぐ天文学、目標と見まがう生物の行動を習得するための動物学、健全な体調を維持するために衛生学、栄養学、発見した目標を要領よく口述するための文学的素養など、限りなく広汎な研究テーマがあるし、精神統一の術を会得するため禅を学んだり、ひたぶるな精進の態度を見習うため名演奏家の演技に接したいと思うこともあるであろう。「一芸に秀でる者は友とすべし」とは、こういう人物のことをいうのであろう。

付録；緒明氏が亀井勝一郎氏の著書から抜粋して、奥様に読んでおくようにと渡された箇所の引用

「人間が一個の人間として形成されるのは、ただ自分自身の力だけに基づくのではない。その原因の中で最も直接性を帯びるのは、自分の先生とか、友人とか、具体的で身近な人間関係であり、そこに成立する邂逅である。」

「古代ギリシャにおいては、道を求むる者は、まず友情を求めた。友情とは、肉と魂が妊娠状態にあるものが、美しい、気高い、素性の良い魂に邂逅して、そこに結合を自覚することだ。人生に於ける最重大事は、この魂の邂逅である。」

（完）

開発官付言；以上、散文的に抜粋してみたが、含蓄のあるエッセイであると思うし、これを書かれた年代が奇しくも今の自分と重なることに、大いに反省と自戒を感じるところである。

自分の意志を表現すること、そして伝えることに努力しよう。

そしてそれが高邁（こうまい）であればなお良いが、決して高慢であってはならないと心掛け、多くの卓越した友人を得て、自分なりの目で見た「名人」を志そう。

以上